



- ①鳥よけのスパイクもおかまいなし。ネオンきらめくまちなかの電線で羽を休めるムクドリ
の群れ＝千葉県市川市の行徳駅前で
- ②ひなを連れだしたカルガモ。人をこわがる様子はない
- ③まちのごみ捨て場をあさるカラス。道路はごみだらけ

と かい 都会に生きる 鳥たち

都市が発達した影響で、鳥の生態が変わってきた。都会に進出した鳥たちは、自然が少ない環境にもかかわらず、たくましく生きている。えさを与えられたり、敵から守ってもらったりと、人間を利用するすべも心得ている。でも、たがいに近づきすぎると、困ったことが起きてくる。



都市化が進むにつれ、夜ふかしする鳥が増えている



鳥ってふつう、日中に動き回るのよね。夜は眠っているんでしょ



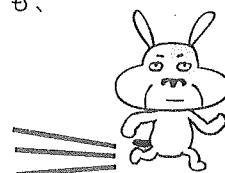
さかり場は夜中でも明るく人が多い。ごみも多く、遅くまでえさをあさっているドバトが見られるそうじゃ。ほかにも、都会になじんだ鳥たちが意外な行動をとっている

と かい 都会で見られるおもな鳥

スズメ、ドバト、ハクセキレイ、ムクドリ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、キジバト、メジロ、シジュウカラ、ツグミ、ツバメ、カルガモ

じゅうみん なや 住民悩ますムクドリの大群

カラスとならび、都会で増える鳥として有名なのがムクドリ。まちでは大きな鳥や動物におそわれることがなく、電灯がともって夜中でも暖かい。雑食性なので、えさもたくさんある。そのため、数千羽で、さかり場や住宅街近くにねぐらをかまえるようになった。鳴き声やふんの雨に悩まされる住民は多く、ロケット花火で追い払っても、すぐにまたやってくる。



どうして都会ぐらしを好む鳥がいるのだろう

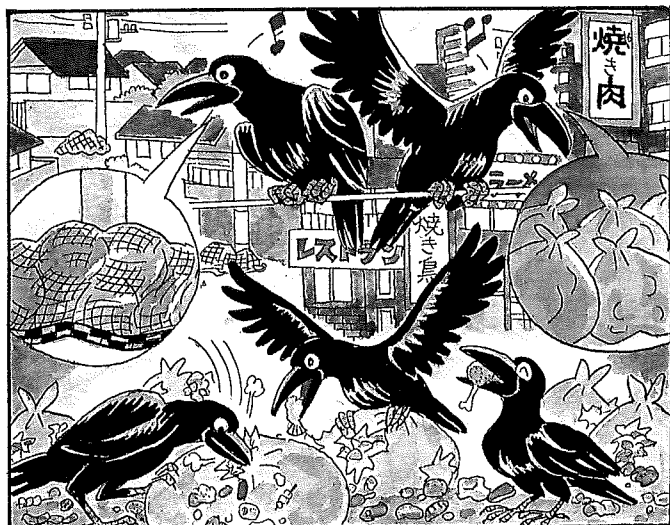


イラスト コンタロウ

うまいえさがいっぱい

早朝、住宅街やさかり場で、ごみをあさるカラス。東京などで問題になっているのは「ハシブトガラス」という種類だ。好物は肉などカロリーの高いもの。焼き肉や天ぷらの食べ残しは、最高のごちそうだ。目がいいので、半透明のごみ袋ごしに目当てのえさを見つけ出す。太いくちばしで袋を破き、ごみを周囲にまき散らす。

・ハシブトガラス……全長57センチ、羽を広げると1メートル。もとは森林にすんでおり、木のある環境がすき。高い建物が多い都市は森林の構造に似ているため、意に増えたといわれている。

人間ってなかなか親切だ

かつて農村では、イネを食べるスズメは害鳥として追い払われてきた。

しかし、田畑のない都会ではスズメ、ドバト、カモ、カラスにえさをやる人がたえない。おそれをいなくなった鳥は、人間にどんどん近づいてくる。警戒心が強いスズメでさえ、手に乗ってえさをついばむ例が報告されている。

敵から身を守りやすい

鳥の巣はヒナを育てる“ベビーベッド”。普通、外敵（人間、ネコ、ネズミ、ヘビ、カラスなど）に見つかりにくい場所に巣を作る。

ところが、人間のそばで子育てする鳥がいる。ツバメだ。

家ののき先やビルの壁に巣をかけ、ひなにえさをあたえるツバメを見たことがあるだろう。「人がいるところなら、ほかの鳥が近づいてこない」と思っているらしい。

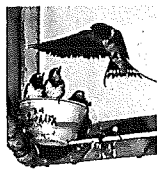
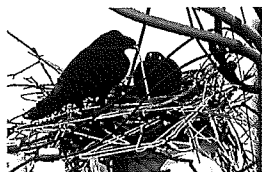


ビル街歩いて堂々子育て

カルガモが、大都会のビルの人工池で子育てすることはよく知られている。

イネを踏み荒らす害鳥として農村ではきらわれているが、都会では、ひなを連れた愛くるしい姿が好まれる。多くの人が見守っている場所なら、カラスやネコにおそわれる心配がないことを、カルガモはよく知っている。

鳥の知恵はすごいぞ



都会の鳥はおどろくような場所に巣を作る。駅のホーム、家のすきま、車庫、マンションのベランダなどだ。木や土が少ないため、巣の材料には意外なものを活用する。カラスは針金のハンガーや枝

を利用＝写真④。キジバトも針金を使う。ヒヨドリはティッシュペーパーやビニールテープを使う。

人が作った巣に入るのはツバメ。カップめん（カップ麺）の器でも子育てする＝写真⑤。

人と鳥とのトラブル どう解消すればいいだろう

鳥は野生動物だ。人間に近づきすぎるとトラブルが生まれ、追い払われたり殺されたりする。でも、本当にそれでいいのだろうか。トラブルの原因をつくったのは、人間ではないだろうか。

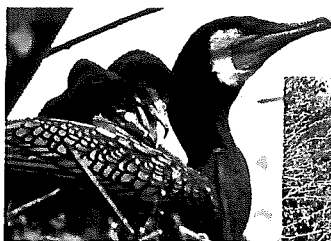
増えすぎて、手に負えなくなった

大型の水鳥、カワウによる漁業被害が深刻だ。全国で6万羽以上いるといわれ、アユやウグイ、フナを食べてしまう。

琵琶湖がある滋賀県では、1990年代後半からカワウがとでも増えた。水質改善が進み、すみやすい環境になったためらしい。94年ごろは4,000羽程度だったのが、2006年秋は4万3000羽に。それにともないアユの漁獲量が減り、94年には1,300トン以上あったのが、2004年は910トンにとどまった。

ふんによって木が枯れたり、悪臭がただよったりという被害も無視できなくなった。

環境省（国の役所）は、07年4月、鳥獣保護法により、カワウを狩猟できることに決めた。



カワウの親子



カワウのふんで真っ白になった
雑木林＝三重県伊勢市

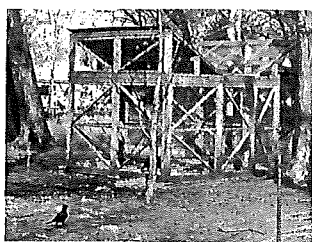
キーワード 鳥獣保護法

野生動物の保護を定めた法律。野生の鳥、動物は、卵もふくめて捕らえてはならない。ただし、狩猟の対象になったもの、環境や農林水産業に被害をおよぼすと認められたものは除く。

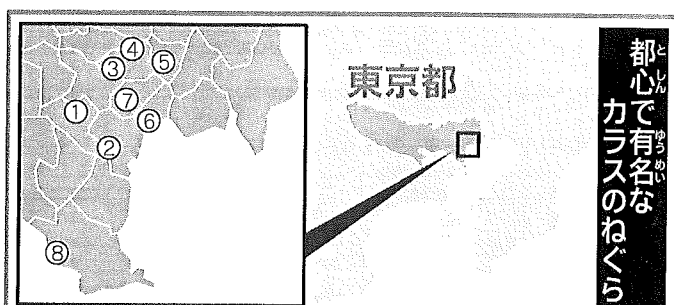
“カラス都市” 東京に3万7000羽

東京ほど、カラス問題に手を焼いている都市は世界的にないといわれている。銀座、渋谷、新宿では、朝、何十羽ものカラスがごみをあさっている。都内のカラスは約3万7000羽とされる。

東京は、都心に緑地帯がたくさんある点が裏目に出ている。カラスの集団ねぐらになっている。



東京都が設置した、カラスを捕まえる
わな＝2004年



東京のカラスはここで眠る

- | | |
|--------------|---------------|
| ① 明治神宮（渋谷区） | ⑤ 上野公園（台東区） |
| ② 自然教育園（港区） | ⑥ 浜離宮公園（中央区） |
| ③ 豊島岡臺地（文京区） | ⑦ 皇居（千代田区） |
| ④ 六義園（文京区） | ⑧ 多摩川台公園（大田区） |

・おもにハシブトガラス

都心で有名な
カラスのねぐら

路上のごみを減らそう

東京でカラスなどが増えたのは、えさになる生ごみを大量に出すうえ、半透明の袋に入れて路上に置いたせいだ。食べ残しをゴミ箱に無造作に突っこむ人も絶えない。えさがあれば、カラスはどんどん増える。

路上の生ごみは何としても減らさなければならない。食べ物が少なくなれば、カラスは自然に数が減っていくと考えられる。

エサをやるのはやめよう

公園や広場で、ドバトやカモにえさをやっている人を見かける。鳥とのふれあいは楽しいが、野生動物にエサをやってはならない。

環境省は、えさをやることで人をおそれないドバトが増えることと警告している。ふんや羽根で汚され、アレルギーの原因になったりする。さらに、えさやりは鳥の習性を変えてしまう。自力でえさをとれないようにしてしまうおそれがある。

努力して捕まえても…

東京都は2000年からカラス対策事業をスタートさせ、巣落としなどを行った。01年は473個の巣を落とし、ヒナ1,095羽、卵107個を取り除いた。また、01年12月から1年間にカラス約9,600羽を捕まえた。

ところが、カラス全体の数は減らず、前の年とほぼ同じぐらいだった。もともと死ぬ率が高い若鳥を捕まえていた▽ほかの土地からどんどん流入している——といった理由が考えられる。



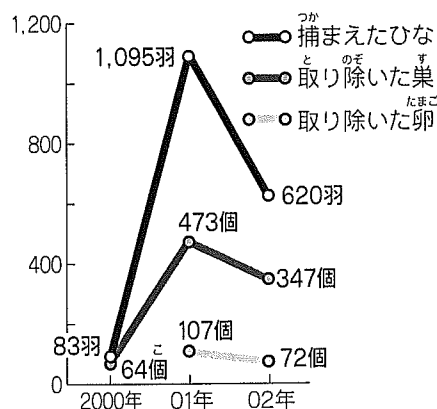
スズメの大量死は何を語る？

2006年冬、北海道各地でスズメ＝写真＝が大量に死んでいるのが発見された。道庁の調べでは計1,517羽。これほど大量に死んだのは国内で初めてだ。

原因はわかっていないが、サルモネラ菌によるものではないかと見られている。1990年代、イギリスでもサルモネラ菌による大量死が報告されている。

鳥インフルエンザや西ナイル熱など、鳥がかかわる病気が注目されている。野生動物とのふれあいには注意が必要だ。

東京都のカラス捕獲事業の結果



日本野鳥の会

<http://www.wbsj.org/>

日本鳥類保護連盟

<http://www.jspb.org/>

東京都環境局

(カラス対策プロジェクト)

<https://www2.kankyo.metro.tokyo.jp/sizen/karasu/>



「わたしのスズメ研究」

(佐野昌男・作、さ・え・ら書房)

「カラスの大研究」「スズメの大研究」「ハトの大研究」

(国松俊英・作、PHP研究所)

「ハヤブサの都市」

(宮崎学・作、フレーベル館)

「都市鳥からフォークロアへ」

(唐沢孝一・作、百水社)

「野鳥記」

(平野伸明・作、福音館書店)